

# 函館国際水産・ 海洋都市構想と大学

赤レンガ倉庫群をはじめとする観光資源を学術・研究と融合させるというユニークな発想が構想に盛り込まれている

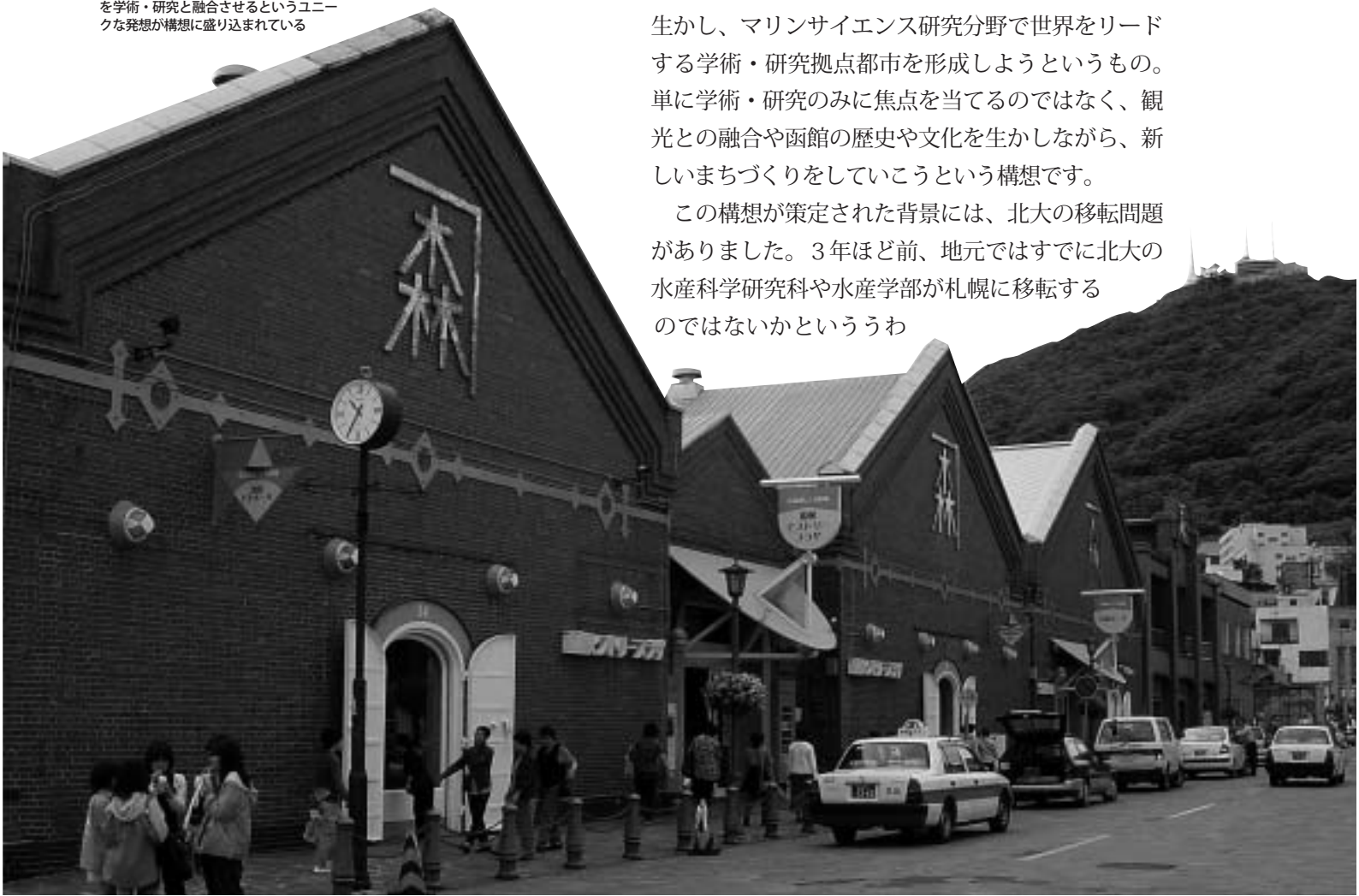
国際的な水産・海洋に関する学術・研究拠点都市を目指し、さらにこれらを観光などとも融合させ、函館をイタリアのナポリやアメリカのウッズホールのような国際的な水産・海洋都市に作り上げていこうという「函館国際水産・海洋都市構想」。産学官連携によって策定された構想によって、函館ではまちが少しずつ変化しつつあるようです。

そこで、この構想の発案者であり、構想策定の中心人物でもある北海道大学大学院水産科学研究科の嵯峨直恆<sup>なおつね</sup>教授に構想に込められた思いなどを取材しました。

## 大学にとっても魅力あるまちづくりを

函館国際水産・海洋都市構想は、自然条件に恵まれ、北海道大学大学院水産科学研究科をはじめとする多くの学術・研究機関や水産・海洋関連産業が集積するなど、水産・海洋に関する研究を行う上で他地域にはない環境が整っている函館のまちの特徴を生かし、マリンサイエンス研究分野で世界をリードする学術・研究拠点都市を形成しようというもの。単に学術・研究のみに焦点を当てるのではなく、観光との融合や函館の歴史や文化を生かしながら、新しいまちづくりをしていこうという構想です。

この構想が策定された背景には、北大の移転問題がありました。3年ほど前、地元ではすでに北大の水産科学研究科や水産学部が札幌に移転するのではないかといううわ



さが流れていました。学内でも情報が集中する札幌で研究活動をしたいという声が、若手教員や学生からも聞かれていました。

嵯峨教授は、'01年に静岡から函館にやってきたばかり。当時は行政も大学側にとどまってほしいと要請をしていたようですが、「函館というまちが魅力的なまちになって、教育研究環境もよくなれば、移転という話にならないのでは」と、ある機会に行政スタッフに話をしたといいます。結局、移転問題はさまざまな要因で困難となったわけですが、嵯峨教授のこの一言が構想策定のきっかけになります。

「大学も独立法人になれば競争力が必要です。教育研究内容もさることながら、ロケーションなどのイメージも大切です。札幌もいいけれど、函館だっという魅力ある教育研究環境を作っていけば、何も移転という声は上がらなかったでしょう。例えば、まちが栄えて、住環境がよくなって、産業が栄えて、50万人程度の人口になれば、書店だって総合書店と専門書店など、多様な店が成り立つはず。もっと大学がこのまちに残りたくなくなるまちづくりをしませんかと問いかけたのです」と嵯峨教授。

この問いかけを発端に、まず人間関係を構築しようと、嵯峨教授や行政スタッフ、企業人などが集まる気軽な居酒屋懇談会を開催します。互いにネクタイを捨てて、本音を語る場を設けたのです。そして、その後、嵯峨教授のほか、行政、地元の企業人、大学教員、研究機関、経済団体などが参加する函館海洋科学創成研究会が'02年に発足、構想策定に向けて動き出します。

### マリンサイエンスと観光や歴史を結び付ける

研究会では初年度、研究会のほか、先進地調査や国内外から講師を呼んで市民フォーラムなどを開催し、函館国際水産・海洋都市構想を策定します。そ



北海道大学大学院水産科学研究科と同大学水産学部

して、翌'03年度にはこの構想を推進するための推進協議会を設立します。

函館国際水産・海洋都市構想には、三つのキーワードがあります。海をテーマとした研究に基づく革新技術や新産業の創出を目指す「マリンサイエンス」。歴史的な街並みと快適な生活、伝統型産業と未来志向型産業、古きものと新しきものの融合が生み出す新しい街を目指す「レトロ&フューチャー」。そして、異国情緒豊かで歴史的・文化的風格のある街並みによる癒し空間や、海に近いといった利便性など、研究者の生活にとって魅力のある函館の観光と学術・研究の融合を目指す「函館まるごとテーマパーク」です。

ここで興味深いのは、研究とは無縁に感じられる観光や歴史や伝統、文化などを融合させようという考え方です。「例えば、西部地区には歴史的な建物がたくさんあります。でも、再利用されていないものもあり、これらの維持や保存は大きな課題です。これらの建築物をレトロな外観は維持しながら、内部を水産・海洋研究のための最先端の機器を配置できるように改造して、研究室として使ってもらえたいと思うのです。これがレトロ&フューチャーのキーワードに代表されるのです」。構想のなかには、函館港のなかにある人工島・緑の島に各省庁・独立法人、水産・海洋関連研究機関や高等教育機関、ベンチャーインキュベーション施設を整備して、マリンバイオなど情報科学を活用した最先端産業活動の拠点づくりを目指す海洋科学研究コンソーシアム形成なども想定されていますが、この近くにヨットハーバーやシーフードレストラン、ジャズの生演奏が聞けるシーマンズクラブなどがあればと、嵯峨教授のイメージは膨んでいます。

「日本の大学は俗世間から離れたところに、高い塀で区切って作られています。でも、ここは大学の研究施設だから市民は入るなどというのはおかしいと



今後は、構想を推進する事務局となる推進機構を立ち上げていきたいと嵯峨教授

思うのです。アメリカやヨーロッパの大学都市は、どこからどこまでが大学の敷地か分からないところも多いのです。大学をつくるなかで、自然に都市の原型のようなものが生まれて、自然に研究者が集まって、学生が集まって、コミュニティーができ、書店ができ・・・という感じです。私が考える函館のまちはそのようなイメージなのです。大切にしたいのは“多様性”。函館は外からやってきた人を食欲に受け入れて多様な文化を作ってきたまちで、そこが非常に魅力のあるまちの要素になっています。研究者だって、仕事が終わればアフター5を楽しみたいし、研究仲間や市民と一緒にお酒も飲みたいのです(笑)」と嵯峨教授はいいます。

### 大学や市民にも変化が

構想が策定されたことで、函館ではさまざまな変化が見られています。昨年6月には構想に賛同する民間の進出第1号企業として海藻技術研究所「アルガテックキョーワ」が開所し、北海道大学水産科学研究科との共同研究を開始。また、文部科学省の都市エリア産学官連携促進事業に函館地域が選定され、コンブやイカを活用する大規模な研究開発に取り組んでいます。さらに、昨年8月には「マリン・フロンティア科学技術研究特区」として函館市が認定されました。

当初、大学人というよりは、個人の立場でかかわっていたという嵯峨教授ですが、現在は学内でも理解を得られるようになり、市民から要請があれば、学部長らとともに函館国際水産・海洋都市構想について講演に行くこともあります。これまで新聞で読

んでいただけの構想を具体的に解説してもらえる場とあって、市民の評判も上々で、少しずつ意識変化が見られているようだといいます。また、北大でもこれまでは大学の公開講座は大学構内で行っていましたが、'03年は西部地区の歴史的な建物を借りて開催するようになりました。テーマもこれまでのアカデミックなものから、この構想をベースにおいたまちづくりをテーマにしたものになり、大学と市民の距離が徐々に近づいてきました。

この構想策定過程で、大学と行政、大学と大学、大学と市民、大学と産業界などの間の垣根が低くなり、距離は確実に近くなったといいます。

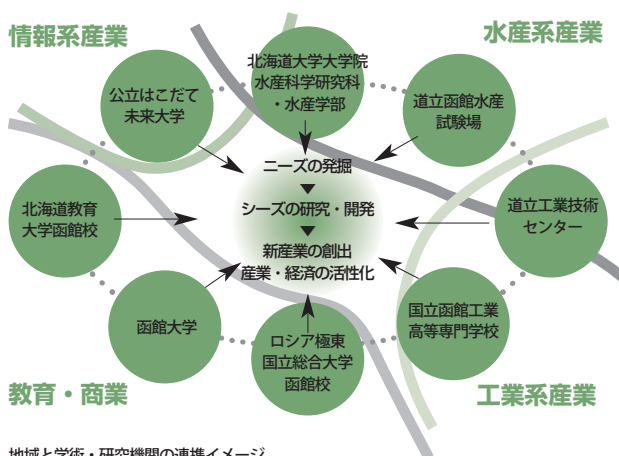
観光、伝統的な建築物、水産など、函館のまちの特徴を有機的に結び付けた函館国際水産・海洋都市構想は、いわば函館のグランドデザインのようなもの。より包括的な構想ができ、まちの指針が明確になったことで、徐々にまちが動き出しています。

「この構想ができたのは、人の利、地の利、時の利だとある人にいわれました。私の声に応えてくれた行政のスタッフ、外の人間を受け入れてくれる函館の風土、そして財政的にも厳しい時期で、大学側も地域貢献を考えなければならない時期になったことが大きかったと思います」と嵯峨教授。

予算ありきで考えるのではなく、志をもって意識改革をしていくことで、まちを活性化していこうという思いで作られた函館国際水産・海洋都市構想。構想はまだまだ緒についたばかりですが、大学と地域の結び付きが深くなることで、今後、函館の魅力がさらに増していくことになるのではないのでしょうか。



函館国際水産・海洋都市構想を紹介するパンフレット(左)と構想書



地域と学術・研究機関の連携イメージ